

台湾の大学事情

岡崎 幸 司

読者諸賢の多くは大学関係者であり、中には台湾の大学事情に興味をお持ちの方もおられるのでは、と思う。そこで、今回は筆者の勤務先を例に学部学生の学業面に限定してその概要を紹介したい。なお、筆者は一介の外国人教員に過ぎないため、誤解していたり理解不足の点があるかもしれない。他大学の動向に不案内であることと合わせてご寛恕願う次第である。

学年度と授業回数

台湾の大学は一学年度二学期制（セメスター制）を採用しているが、八月開始という点で日本の大学と異なる。たとえば、中華民国九十九学年度（平成二十二年学年度・二〇一〇学年度）は二〇一〇年八月に始まり、二〇一一年七月に終わる。もつとも、七月と八月は夏季休暇なので、実際は第一学期が九月開始・翌年一月終了、第二学期は二月開始・六月終了となる。

授業回数は中間試験及び期末試験を含めて一学期十八週で日本より若干多い。台湾は祝日が非常に少ないうえ振替休日制度もない。しかも、筆者の勤務先では休講する

ときは代講か補講が義務付けられているため、ほぼ額面通り十八週の授業が行われる。学部の授業形態は通常講義のみで、特別な場合を除いて集中講義形式の授業は開講されない。

一学期十八週制は、年間の休暇が十六週しかないことを意味する。標準的には夏季休暇十一週、冬季休暇五週で、春季休暇は無いが、あつたとしてもわずか数日であり無きに等しい。

単位数の計算方法と卒業必要単位

単位数の計算方法は日本とよく似ている。一般的に、日本では九十分授業毎週一回十五週を二単位とするのに対し、台湾では五十分授業毎週二回十八週を二単位として計算する。

卒業必要単位数は、学則により、学科を基本単位として一二八単位から一四八単位の間で設定することになっている。

二〇〇九学年度日本語学科新入生を例に挙げると、教養科目二十八単位（必修十単位・選択十八単位）、専門科目一〇四単位（必修七十八単位、選択二十六単位）、合計一三二

単位が卒業必要単位数である。一見したところ日本の大学とほとんど変わらないが、右記の一三二単位とは別に、〇単位扱いの教養九科目（体育四科目、軍事教育二科目）、三次英語二科目、サーピス学習一科目）をすべて履修する必要がある。これら教養九科目について、日本の大学を参考に三次英語と体育を各一単位、軍事教育およびサーピス学習をそれぞれ二単位として計算すると、教養科目は四十単位修得しなければならず、実質的には一四四単位が卒業必要単位数ということになる。授業時間数と事実上の卒業必要単位数を単純に比較する限りでは、台湾の大学の方が日本の大学より厳しいように感じられる。

一学期十八週授業・実質的な卒業必要単位数一四〇単位超に対する見方は分かれよう。台湾の大学は教育熱心である、と肯定的に評価することができる反面、詰め込み教育と批判的に理解することも可能であろう。

試験・履修放棄

毎学期半ばに中間試験が実施される。筆記試験の場合、教員は翌週に採点済みの答案を返却、正解（模範解答）及び採点基準を解説した後に各種の質問や疑問を受け付けるのが普通である。たとえば、点数の修正要求が出された場合、学生の主張が正しいれば要求に応じるし、的外れなときは理由を説明して却下する。質疑応答を終えた後、受講生全員が採点内容と点数に同意したこ

とを確めてから、採点済みの答案を回収（点数の確定）、時間が残れば授業を行う。

答案返却を学生の立場から見れば、正解と採点基準に照らし合わせて点数と採点内容を確認できるほか、点数の修正を要求する機会も与えられるため、採点の透明性・公平性が確保される。答案の返却は、試験の採点、ひいては成績評価に対する信頼度を高める意味でも良い習慣とされている。とは言え、教員は、一週間で採点を完了し、模範解答と採点基準資料の作成、さらには授業の準備までしなければならぬ。教員にとって、試験問題の作成を含めた一連の作業はかなりの重労働となっている。

中間試験の翌々週は履修放棄申請期間である。学生は、中間試験の結果から単位修得が難しいと判断した授業や興味を失った講義の履修放棄を申請する。履修放棄期間と期末試験の間に学生による授業評価が実施される。詳細は省略するが、学生による授業評価はさまざまなところで重要な意味を持つ。期末試験は最終週である十八週目に行われる。期末試験が終わるとすぐに長期休暇に入り大部分の学生は帰省するため、答案を学生に返却する必要はない。

最終成績は絶対評価に基づき百点満点で表示される。二〇〇九学年度の場合、特段の事情があり関係部局の許可を得た場合を除き、教員は第一学期・第二学期とも期末試験終了後二週間以内にコンピュータに入力することになっていた。各学期の最終

成績提出期限は毎年公開されているので、学生は遅くとも入力締切日の翌日には成績提出が遅れる科目を除く全受講科目の最終成績を知ることが出来る。最終成績を見た学生が教員に説明を求めることもある。

編入学試験

台湾の大学では原則として学科単位で二年次編入学試験・三年次編入学試験を実施する。募集人数は学生定員から在籍者数を引いた欠員数であり、欠員がなければ実施しない。大学入学試験で希望の大学（学部・学科）に入れなかった学生、大学入学後に知的関心が変わった学生、日本の短大・高専に相当する「専科学校」から大学編入学を目指す学生などが応募する。

編入学試験は夏季休暇中に行われ、合格した学生は新学年度から新しい大学で勉学に励む。中には冬季休暇中に編入学試験を実施、第二学期からの編入学を受け入れる大学もある。

卒業と卒業後の進路

四年生の第二学期に卒業試験が実施される。卒業試験は期末試験より二週間早く、四年生のみを対象とした授業で行われる。教員は卒業試験の翌週月曜日までに最終成績を入力、その直後の土曜日に卒業式が舉行される。卒業試験から卒業式までハード・スケジュールが続く。

順調に単位を修得してきた四年生は六月

中旬の卒業式出席で大学生活を終える。そうでない四年生は卒業式参加後も授業に出席、期末試験を受けなければならぬ。卒業要件を満たせば七月に卒業できるが、単位不足の場合は「延畢」（卒業延期）が待っている。不足単位数が少ないときは、夏季休暇中の「暑修」（サマー・スクール）で必要な単位を修得すれば九月卒業が可能である。単位不足が深刻なときは留年して半年あるいは一年、場合によってはそれ以上の時間をかけて卒業を目指すことになる。

大学卒業後の進路や就職は、徴兵令が施行されている関係もあって日本と大きく異なる。進学者・既に兵役を終えた者・病気等による免除者を除く男子学生は入営、約一年間の軍隊生活をおくる。兵役義務がない女子学生は、日本の学生と同様に選択肢は多いが、台湾では新卒一括大量採用という習慣がないため、卒業後に就職活動を始めるのが一般的となっている。

本稿では筆者の勤務先を例として学部学生の学業に焦点を合わせて台湾の大学事情を紹介した。学生ばかりではなく、教職員、とりわけ教員を取り巻く状況も日本と台湾では大きく違っている。台湾における大学の教職員事情に関しては時期を見て取り上げたいと思う。

（おかげさうじ 中華大学人文社会学院）